



トレプレフ

作家志望の青年。



アルカージナ

トレプレフの母。大女優。



トリゴーリン

流行作家。アルカージナの愛人。



ニーナ

裕福な地主の娘。女優志望。



ソーリン

アルカージナの兄。



シャムラーエフ

ソーリン家の支配人。退役中尉。



ポリーナ

シャムラーエフの妻。



ドルン

医師。



マーシャ

シャムラーエフとポリーナの娘。



メドベジェンコ

教師。

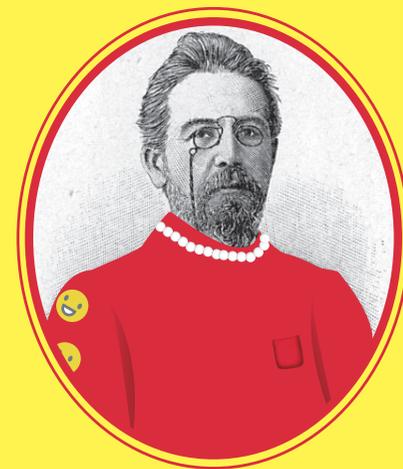
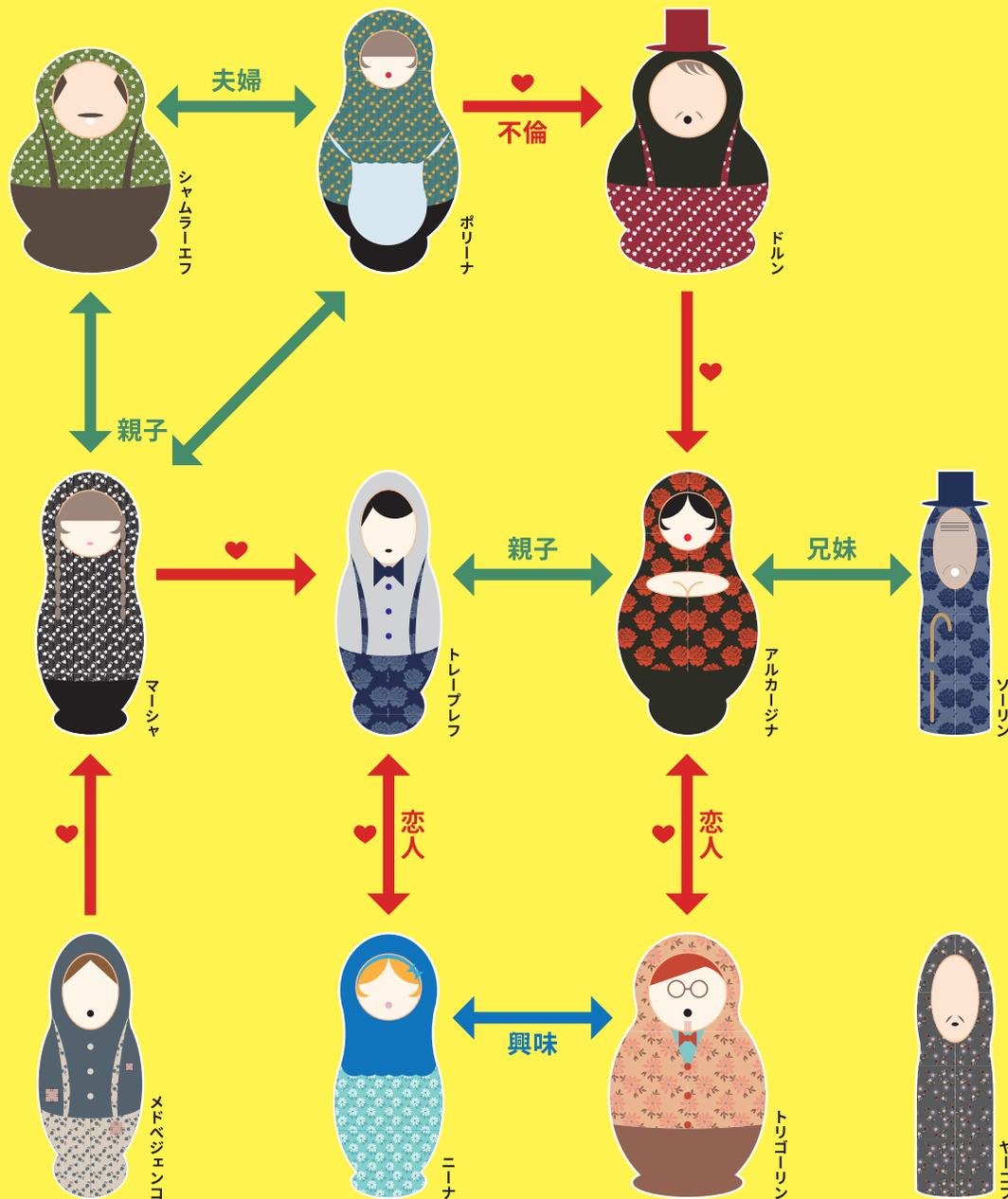


ヤーコフ

下働きの男。

「かもめ」人物相関図

恋がっぱいで…。魔法の湖



かもめ ガイド

「かもめ」とは？

湖畔の田舎屋敷を舞台に、芸術家やそれを取り巻く人々の群像劇を通して人生と芸術とを描いた、ロシアの古典戯曲。1895年の晩秋に、アントン・チェーホフによって書かれた。



【第1幕】

ソーリン家の近くにある湖。まもなくトレープレフの舞台が始まります。

メドベジェンコがマーシャを口説きますが、マーシャはつれない反応。トレープレフとソーリンが話していると、ニーナの足音が聞こえてきました。ニーナは舞台の主役です。

アルカージナ、トリゴーリン、ドルン。ソーリン家の人々が集まり、幕が上がります。ところがトレープレフのお母さんで、有名な女優のアルカージナは劇を真面目に見てくれません。怒ったトレープレフは途中で幕を下ろし、どこかに行ってしまうしました。

みんながニーナをねぎらいます。ニーナは憧れのトリゴーリンに挨拶をして、家に帰っていきました。一方、トレープレフは、ドルンに励まされますが心は沈んだまま。マーシャがトレープレフを連れ戻そうとやってきましたが、ほっとしてくれ！と冷たい態度。マーシャはドルンに、トレープレフが好きだと打ち明けます。

「ナーバスだなぁ、みんな！
恋がいっぱいいて…。魔法の湖だな！」

【第2幕】

数日後の昼間。みんな庭に出て、思い思いに過ごしています。アルカージナとシャムラーエフは馬の貸し借りで喧嘩をし、ポリーナはドルンに言い寄っています。ニーナが一人でいると、トレープレフがやってきて、撃ち落としかかもめを足元に置きました。

「すぐ、僕も、おんなじ風に死のうと思う。」
「わたし、馬鹿だから、わかんない。」

そこへやってくる、トリゴーリン。トレープレフは去ってしまいます。ニーナはトリゴーリンに惹かれ、トリゴーリンの人生に憧れます。そんなニーナにイラッとしたトリゴーリンは、自分の苦悩を打ち明けます。そのとき、ニーナの側に横たわるかもめを見て、あるプロットを思いつきます。

「若い女の子が湖のほとりに住んでるのね、子供の頃から、君みたいに。かもめみたいに湖を愛してて、かもめみたいに幸せで自由だった。でも、たまたま、男が来て、なんて気もなく、その子をめちゃくちゃにしちゃう、このかもめみたいに。」

【第3幕】

トレープレフは自殺を試み、失敗。その後トリゴーリンに対決を挑みました。それを知って、マーシャはメドベジェンコと結婚する決意をします。アルカージナとトリゴーリンはモスクワへ帰ることに。ニーナがトリゴーリンにメダルを渡すと、そこにはトリゴーリンの本の一節を示す文字が彫られていました。

「もしも、私の人生がいるなら、
来て、持ってって。」

すっかりニーナに夢中になってしまい、モスクワに帰りたくないと言うトリゴーリンでしたが、アルカージナの説得に流されてしまいます。

「どうぞ、連れてって、でも、ただ、一歩も、そばから離さないで。」

馬が到着し、とうとう家を出て行く間際。ニーナはトリゴーリンにこっそり、自分もモスクワに行って俳優になることを伝えます。トリゴーリンはニーナに連絡をよこすよう伝え、二人は長いキスを交わします。

【第4幕】

それから2年後。トレープレフは作家として雑誌に載るようになりました。マーシャとメドベジェンコには子供が誕生。そんな中、ソーリンの体調がいよいよ悪くなり、アルカージナとトリゴーリンは再びソーリン家に向かいます。二人の到着を待つ中、ドルンがトレープレフにニーナの行方を尋ねました。ニーナはモスクワに行った後、舞台も私生活も上手くいかなかったようです。そのニーナも数日前からこの町に戻ってきているようですが、みんなの前には姿を現しません。トレープレフは来ないだろうと思っています。アルカージナとトリゴーリンが家に着き、みんなでゲームをはじめます。トレープレフは一人、メランコリックなピアノを弾いたり、窓を開け閉めしたり落ち着かない様子。夕食を食べに皆が部屋を出て行った後、トレープレフは執筆に取り掛かりますがうまくいきません。その時、誰かが窓を叩く音。ニーナです。二人で少し会話をした後、ニーナは一人で去っていきました。トレープレフは自分の原稿を全て引きちぎり、部屋を出て行きます。

そして、遠くで銃声が響くのでした。